

# 序

この度、「見逃し、誤りを防ぐ！肝・胆・膵癌画像診断アトラス」を出版する運びになった。本書の構成は「肝・胆・膵癌を疑う場合の診断アルゴリズム」から始まり、「肝・胆・膵癌の画像検査法」および応用編として「肝・胆・膵癌の画像診断のポイント」を具体的な症例を呈示しながら、各エキスパートの方々に執筆いただいた。

肝細胞癌ではまず診断アルゴリズムについて解説した後、各種画像診断特に超音波検査やMD-CT, MRI, あるいはCTHAやCTAPによる肝細胞癌の診断について詳細に述べていただいた。特に最近、進歩の著しい造影超音波, EOB-MRIについては詳しく解説をいただいた。その次に頻度は低いものの現在stem cellとの関係で注目を浴びている細胆管細胞癌や混合型肝癌, あるいはその他の悪性腫瘍の詳しい解説, 鑑別のポイントなどについて触れていただいた。また, 肝細胞癌と鑑別すべき良性腫瘍である肝細胞腺腫, 限局性結節性過形成, 肝血管筋脂肪腫や肝炎症性偽腫瘍などもエキスパートの先生方に解説いただいた。肝細胞癌と鑑別の困難な良性腫瘍をいかに正しく診断するかが肝画像診断においては最も重要である。

胆道癌, 膵臓癌についても同様の流れで解説いただいた。主に私が担当させていただいたのは肝癌の項目であるが, 胆道癌, 膵臓癌の項もちろん目を通させていただいた。しかし, 胆道, 膵臓の詳細な校閲については山雄健次先生に負うところが大きかった。

本書には「診断の誤りを防ぐ肝胆膵癌の画像診断のポイント」が網羅・整理されており, 本書を通読するだけで読者にとっては頭が整理される内容になっていると自負している。したがって本書は初学者のみならず消化器内科医および肝胆膵の専門家ならびに消化器を専門とする外科医, 放射線科医にも広く勧められる良書に仕上がったものと確信する。

最後にこの本に推薦の言葉を書いていただいた有山 襄先生, 幕内雅敏先生に厚く御礼を申し上げたい。有山先生は日本の胆膵画像診断における先駆的な方で胆膵画像を志す多くの後進を育てられ, また私事ではあるが, 私の大学の先輩でもあるので個人的に大変に尊敬している方である。また, 幕内雅敏先生は私が大学を卒業した研修医の頃から国立がんセンターでの患者さんの手術および丁寧な術中超音波を見学させていただいた。幕内先生からは学問に対する考え方や論文執筆のイロハから教えていただき最初の論文チェックまでしていただいた。幕内先生は主として超音波を中心とした肝癌の診断学においては大変に造詣が深く英文で臨床論文を書くことの重要性を私に教えてくださった恩人でもある。世界的に活躍される幕内先生に身に余る推薦の言葉を書いていただいたことを大変感謝している。

2010年8月

近畿大学医学部消化器内科学  
工藤正俊

# 序

近畿大学医学部消化器内科学教授の工藤正俊先生とともに「見逃し、誤りを防ぐ！肝・胆・膵癌画像診断アトラス」の編集を担当させていただいた。工藤先生と相談し、各々の領域では“この人しかいない”と自負できる執筆者を選定させていただき、ご執筆いただいた原稿を肝臓領域は工藤先生が、胆膵領域は私が統一感のあるものに編集させていただき、この本が完成した。

同じような内容の本が多数、出版されているなかで“通り一遍の内容”にはせずに、執筆者の先生に依頼し、ガイドラインや癌取扱い規約も多用しポイントを整理し簡潔に記述していただいた。また図表においても、基礎編の診断アルゴリズムではフローチャートを、画像検査法では各検査法の具体的な方法や写真を、さらに応用編では各疾患の典型的な画像やさらには関連、あるいは鑑別すべき疾患の画像をふだんに掲載いただいた。

本書の内容は若手医師の間ではよく読まれていると聞く「レジデントノート」の出版元の羊土社の依頼でもあり、当初は研修医、消化器専門医を目指して勉強に励む消化器内科医、消化器外科医、放射線科医、放射線技師を対象に企画されたものである。企画の特徴は本書の見出しにもあるように「見逃し、誤りを防ぐ！」という点にあり、各領域のエキスパートである執筆者の先生方が豊富な経験に基づいて記述された内容をもとに診断を進めていけば「見逃したり誤った方向に行くことなく、正しい診断」に到達できるはずである。その意味では消化器内科専門医、さらには肝胆膵を専門にしている医師にとっても今までの知識を整理し、さらには最新の知識を得る絶好の機会になる本でもあると確信している。

最後に、この本をご推薦いただいた有山 襄先生、幕内雅敏先生に深甚なる感謝を申し上げたいと思う。本書のご推薦をどなたかをお願いすることを考えた際、工藤先生は幕内先生のお名前をあげられ、私は即座に有山先生をお願いしたいと考えた。有山先生は日本の膵胆道領域における画像診断のパイオニアであり、私自身もそのご指導のお蔭で今日の立場にいたることができたと思っている。そのお蔭で世界的に高名な工藤正俊先生とご一緒にこの本を編集することができ、光栄の至りである。また、執筆者の多くは学会、研究会などでは大変親しくしていただいている先生方であり、両編者が専門の消化器内科のみならず、外科、放射線科の先生にも参加していただき、この本が完成したことを誇りに思い、また感謝を申し上げたい。この本が難治癌たる肝胆膵癌を診療する医師、ひいては肝胆膵癌に苦しむ患者さんのために大いに役立つことを切に願って筆をおく。

2010年8月

愛知県がんセンター中央病院消化器内科  
山雄健次